

言説の怪物*

——『アカデミックな馬』読解——

西谷 修

すでに『眼球譚』の匿名作家となっただけは、表向き国立図書館賞牌部員という職業にふさわしく、美術・考古学誌「アレチューズ」にごく専門的な学識に支えられた古銭学関係の論文を発表していただけの人物が、今日その名で知られるジョルジュ・バタイユとして時代の創造的な言説交信の場に公然と登場したのは、おおむねかれ自身の編集になる雑誌「ドキュマン」と、そこに発表された一連のスカンダラスな記事によってであった¹⁾。これらの記事はあたらかぎり雑多な領域にわたる題材をそのつど口実に書かれているが、そこには明らかに題材の「多様性を凌ぐ一体性」²⁾が現前しており、後のバタイユがヘーゲルの弁証法的言説を換骨奪胎することによって練り上げられた精緻な表現を与えることになる思考のモチーフの展開をすでにそこに見てとることができる。「ドキュマン」の諸記事の色調を決定しているのは、「汚辱に訴える」³⁾と公言してはばからないことさらな奇矯さ粗暴さ、糞尿譚的な猥雑さであるが、そこに強固な一貫性がかもし出され、またそれが語の深い意味でのスカンダルとなっているのは、ただ単に目につきやすいそれらの話題によるよりも、そのような話題を必然にしましたそれらの話題が必然とする特異な言説のあり方そのものによってだということべきだろう。規則正しい論理の妥当な展開によって冷静な理解力に訴えるよりも、そのような言説に支えられた理解作用への躓きの石としてはたらきかけ、知性の自足的な操作を破綻させてその読書をつねにひとつの「体験」とせずにはおかないバタイユの言語表現が、のっけからかれのものであったということをこの文章は遺憾なく示しているのである。

「ドキュマン」創刊号(1929.4)にバタイユは『アカデミックな馬』と題する一文を発表した。おそらくはその公的な経歴ゆえにこの雑誌の編集に起用されたバタイユの編集委員会に対するアリバイでもあるかのように、ガリア時代の古銭を題材に書かれたこの文章は⁴⁾、一見謎めいた不透明さをおびているが、まさにこの不透明さによって、M・レリスが「不可能な雑誌」と呼んだ「ドキュマン」と、あたかもこの雑誌の運命のうちにおのれの思考の成り立ちを象らせるかのようにそれを「解体しながらつくりあげた」⁵⁾バタイユのデビューを飾るにふさわしいそれと語らざるマニフェストとなっている。もちろんこの文章は、雑誌におけるバタイユの影響力が決定的なものとなってから書かれた、さらに大胆かつ挑発的でじかに問題の核心に触れた一連の文章——たとえば概念的思考にかえて様相による思考を提起した『花言葉』(3号)、反ヘーゲルの立場をうち出し敵が何であるかをはっきりと示した『人間の姿』(4号)、バタイユの人間解釈の基軸をなす直立姿勢の「読み方」を示した『足の親指』(5号)、さらには反イデアリズムに明確な原理的表現を与えた『低次唯物論とグノーシス派』(6号)など——と較べてことさら重要な提言を含んでいるわけではない。だが、古い貨幣を題材として表現の問題を扱うかたちで展開されたこの小論は、書かれた内容によってというよりも書かれ方そのものによって、バタイユの思考とその表現のあり方を映し出し、以後「ドキュマン」誌上で展開される言説の理解すべき場をなすとともに、そこに提示される諸テーマの先取りされた実践となっている。

本稿ではこの『アカデミックな馬』の読解を通じて——単になにが語られているかを問題にするのではなく、いかに語られているかを同時に問うことによって——「ドキュマン」におけるバタイユの言説の基本的特徴と、そこに実現をみている思考のモチーフとを考察してみたい。

バタイユが古い貨幣に取材した論文——古銭学的言説によってデビューしたということは、雑誌の性格とかれの職業とに由来する外的要請を反映しているばかりでなく、それ自体バタイユの言説の性格を考えるうえできわめて象徴的なのだということを、まずはじめに確認しておこう。

貨幣とは原則的に商品交換の手段であり、一時代の経済的な交換体系のうち

にあってはじめてその機能を果たすものである。だが図書館に置かれた貨幣とはそれだけで逸脱した存在であり、おのれに生を与え透明ならしめていた本質である価値表象としての機能を失い、その残骸として無意味な物質性をあらわにした、交換体系にとっての異物である。貨幣がその表象機能を果たすためには不可欠な、しかし同時に過剰な部分、交換体系内に生きている間は無いものとして扱われ（貨幣の材質やその審美的価値は貨幣の表示する価値とは関係ない）、交換手段としての生を失うことによってあらわになる貨幣のこの物質的現存、それが古銭学の対象であり、バタイユが「アレチューズ」のとき以来身を置いていたのは、このような異物たる貨幣の物質性をめぐって展開される言説の場なのだ。ただ、通常古銭学と呼ばれるものが、知の体系内の庶子として、審美的言説や歴史的言説の周縁にささやかな場を得ることに意を尽くし、交換体系の異物として今はそれ自身の生を回復している貨幣の物質的現存を、再び単なる口実としながら、貨幣の死んだ機能の亡霊をもうひとつの交換体系（知の）のうちに再回収することによって、その物質的現存に二度目の死を与えその埋葬を完了する役割を果たすのに対し、バタイユの古銭をめぐる言説は、交換体系における表象機能の死があらわにする異物性という古銭の本性を裏切ることなく、みずからこのような古銭にほかならぬものとして、すなわちそれ自身知の交換体系内の異物としておのれを展開するのである⁶⁾。つまり時代の知の交換体系のうちにあってそこに組織され、同時に他を組織することによってその汲み尽くせぬ現実のうちに溶けこみ生きる透明な言説ではなく、その体系に帰属せず言説的価値に還元されない流通過程の異物として、その異様な現存によっておのれを主張する言説なのである。そしてこの言説はそれが表示する意味としてよりはことさらに不透明なものとして（受け取る者にいくばくかの価値をうけわたす貨幣ではなく、その形象によってひと目をひく、あるいはさらに投げつけられる貨幣のように）はたらきかけ、理解にとってのスキャンダルとなって読む者を単に意味伝達の次元にとどまらない反応へと誘いこむのである。

ところで、バタイユによって雑誌の表題として選ばれたドキュマンとはほかならぬそうした言説の謂いである。というのもドキュマンとは、それが一次的

言説であった時代(場)から切り離され、別の場に運ばれて直接性を失った言説(生きた有機的場をなす言説ではなくも[・]の[・]として利用される言説)であり、それをド[・]キ[・]ュ[・]マン[・]たらしめる言説の中で交換価値としてよりも使用価値として生きる言説なのだから。そして、幾多の反抗のマニフェストが、それに直接的な生気を与えていた時代の現実を失うにつれいつしか単なるド[・]キ[・]ュ[・]マン[・]となってしまふ運命を免れないなかで、総集版『ド[・]キ[・]ュ[・]マン』の編者B・ノエルが言うように、この「ド[・]キ[・]ュ[・]マン」だけが逆説的になお読む者の平静を奪わずにはいない力を秘めているとしたら⁷⁾、それはこの言説がその表象機能によってのみ生きているのではなく、その機能の死によって本来の役割とは異質な様相をあらわにしそれによって現存する図書館の貨幣のように、時代の交換体系(商品あるいは知)による限定の外にある剰余の部分によって生きているからにほかならない。以下にそのことを『アカデミックな馬』の具体的な読解を通して示してゆきたい。

*

* *

『アカデミックな馬』は、「人類がおのれをその唯一の発現だと信じこんでいる自由」が、動物にもやはり配分されているということを「異論の余地がない」とする筆者が、「独断を避けるため」両者の間に「共通の尺度を確立」しようという提言から出発する⁸⁾。その「尺度」は「人類の進化に並行してみられる造形上の諸形態の交替」と「自然界の諸形態の進化」との類似に求められる。造形上の交替は、ギリシャ文化に代表される「^{アカデミック}正統的・古典的な様式」とガリアの文化にあらわれた「バロック的な錯乱した野蛮なもの」の対立として現われており、筆者によればこのような表現上の様式は、「事象の本質的状態の発現」であって、この二つの様式の相異が示すものは、「安定した組織化の能力と、不安定と、はけ口のない昂奮」との対比なのである。

動物界にも「同等の対立」があり、馬や人間のような「端整で完成された容姿」をもつ動物のかたわらに、河馬やゴリラ(馬と人間に系統的に隣合っている)あるいは蜘蛛のように醜悪で不快な動物がいる。そしてこのような対蹠的形態の継起は、自然の「自分自身に対する永続的反抗」を示すものと考えら

れ、人類史にあらわれた上述の交替もこのような「反抗の諸局面のひとつにすぎないのではないか」とされる。そしてこれを原理的論拠とし、現状分析たる次のような結論が導かれるのである。「しかし、造形上の諸形態の変化はしばしば大変動の主要な徴候を表示するものであり、したがって、端整な調和をもたらすすべての原則を否定することによって脱皮の必要性を証してみせることがないならば、なにごととも転覆されえないとさえ思われる。次のことを忘れてはならない。ひとつには、最近のこうした否定が、あたかも存在の基盤そのものを告発されたかのように、このうえなく激しい怒りを惹き起こしたこと。いまひとつは、人間生活の現下の諸条件とはまったくもって相容れないある精神状態の存在を表現するものだが、事態はいまだその深刻さに気付かれぬまま経過しているということである。」

ここに述べられた「最近の否定」なるものが、シュルレアリスムを頂点とする文化の全領域にわたる一大変革の動きをさしていることはいうまでもない⁹⁾。筆者はどうやらこの反抗の動きに肩入れしており、文章の大半を占める奇妙な論証は、この反抗の必然性を証明することでそれに「客観的」論拠を付与しようとするものだということがわかる。だからこの論旨の異様さは改めて指摘するまでもない。一個の文化現象に与えられたこの「客観的意義」は、自然史的な展望のうちに無媒介に据えられ、また一方、いかなることばもこの反抗の価値を高めているようにはみえないからである。

この文章は、正面切ったマニフェストとかポレミックとかのかたちで書かれているのではなく、偏りのない公平な立場からの批評的考察といった装いをおびている。筆者は一貫した非論争的な口調で「独断を避けるための証明」に終始し、主観に溺れずおのれの判断に客観的な根拠を与えるという正当な作業こそがこの短文の意図だとしているかのようである。だがこの見あげた目論見も、人類の存在状態の変遷を導いた「自由」と、動物の形態に現われた自然の乱脈さとを同一視するという荒唐無稽な問題設定によって、始めから帳消しにされている。歴史を形成する人間の営みのうちに「自由」の発現をみるのは異論のないところであるだろうが、自然の示す多様性のうちにはいかなる意志も選択も介在してはいない。そればかりか、人間に帰属される「自由」とは、人

間が自然の支配の外にありそれと対立するがゆえの「人間的自由」なのである。だが筆者はこともなげにこれを混同する。ギリシャ人が貨幣に刻んだ端整な馬とガリア人の奇怪な馬とが示す造形表現上の交替は、「馬が巨大な厚皮動物から派生した」とか、人類が「醜悪な猿」に隣合っているとかいう事実と比較しうるものとされ、端正なものと醜悪なものとのこのような継起に関して、「自然の自分自身に対する反抗」という「客観的意義」が与えられるのである。

ある事象に「客観的意義」を与えるとは、それを既に把握され意味づけられたものの秩序のうちに組み込み、他の「象」との論理的な関係のうちに繋ぎとめることである。それがまた、有効で流通力がありひとに理解させそのことで役に立つ「アカデミック」な言説の役割でもあり、この文章に照らせば、ギリシャ哲学が代表する傾向すなわち「崇高かつ断固たる思想が、事象の流れを規制し誘導するのを目のあたりにしようとする欲求」に結びつくものである。だが偏りのない姿勝を気どるこの文章は、荒唐無稽な不条理をかかえこみ、はじめからまともな論議の足場を踏み外している。文化という人間的な事象を語るためにはそれに見合った人間的尺度が要求されるものだが、筆者はそのような自明の約束事をあたかも人間的偏見として捨て去っているかのようだ。そしてこの見さかいのない偏りなさは、用語の選択のうちにも貫かれており、醜悪な様相にはそのおぞましさを強張する遠慮のない形容がほどこされ、端正なものにはそれにふさわしい修飾がいやがうえにもその品位を引き立てている。つまり「アカデミック」な言説なら、おのれに品位をもたらすために概念化しながら排除する表現の心情的価値を、むき出しに発散されるがままにしているのである。その結果、額面上の非論争的な運びとそれを支える硬質な用語法が相俟って与える一種重厚な印象に、異様な野放図さと生々しさが入り混り、文章全体はその装いに反して、それを染めあげる強烈な主情を無気味に漂わせるものとなっている。

言説を「アカデミック」たらしめる原則を見さかいなしに過剰適用され、その足場を踏み外して本来の額面の機能に破綻をきたしたこの言説は、しかしながら読む者の口からパロディといういささか便利に過ぎることばを引き出して用済みになるたぐいのものではない。この逸脱はそれ自身ある積極的な表現な

のであり、いいかえるならこの言説は、語る機能によってよりもむしろ語る機能の麻痺によって語っているのである。そしてこの語らぬ語りを読み解く鍵は、ほかならぬ『アカデミックな馬』の中に与えられている。というのも、この言説を不透明なものとしている逸脱は、ギリシャ人の描いた端整な馬を模倣しながらガリア人がかれらの馬の表現にもちこんだ変則性と正確に呼応するものであるからだ。

ギリシャ的・ガリア的という一見目なれた対比のなかで筆者がギリシャ人に代表させているのは、アクロポリスの建築やプラトン哲学のうちに発現しているような、「あらゆる価値がそこから生ずる一種の理想的な完成」を目指す傾向であり、それと結びついた「安定した組織化の能力」である。そしてかれらが好んで馬を描いたのは、馬が完成された端正な形姿をあらかじめ備えており、理想という「高次の価値」の存在をまのあたりにしたいというかれらの願望の実現に格好の素材であったからだ。つまり馬を描くことはその形を描くことであり、そのことで理想に形あらしめることなのである。ここにはたらく通常理性の名に結びつけられる力は、表現のうちに規則的で明晰な形式としておのれを成就するのだが、この実現された結果としての形式は、自己に合致した本質としての形式であり、おのれのうちに表現の運動を完結させる自足した表現としての形式である。いいかえればギリシャ人にとって、馬を描くこととその動機づけと描かれた馬とは別のものではなく、すべては理想の現実化へと収斂し描かれた端正な馬のうちに完結しているのである。「アカデミックな馬」ということばがこの重層性と表現の一義性とを端的に示している。それはアカデミックな形姿をもつ馬であると同時にアカデミックに描かれた馬でもあり、自然界における理想の表現である馬のこれまた端整な表現として、理想的な完成（完成とは理想＝観念的なものだ）へと向かう動きを一身に集約している。こうして「アカデミックな馬」は、ギリシャ的精神の動きが収斂する虚焦点ともいうべき理想に与えられたひとつの貌であり、この表現はおのれのうちに自足する完備した単一的なものとなっている。

一方、ガリア人が代表するのは「不安定と、はけ口のない昂奮」、^{イデー}「ギリシャ人の理想主義的観念が必然的に抑止したあらゆること、これみよがしの醜悪さ、

阿鼻叫喚をまえにした逆上、度はずれの咆哮、つまり何の意味も何の効用もなく、希望も安寧ももたらさずいかなる権威もさずけはしないあらゆること、つまりは乱脈で暴力的で没義道な「人間の夜」闇にかくれた獣的な側面である。ひとことでいえばギリシャ人の端整さに対して醜悪がかれらの特質なのだが、だからといってかれらはギリシャ人の馬に対抗してもっと醜悪な動物（たとえば河馬）を描くことでおのれの心性の表現としたわけではない。まさしくそのような比較や反省がもたらす自覚とはあずかり知らぬところでかれらはギリシャ人の馬を模倣したのだが、かれらの心性は秩序や規則的な形式によって「必然的に抑止され」てしまうものであり、いいかえれば秩序がそれを無力化することによって成り立つ当のものなのであり、ギリシャの馬の端整な形式のうちにおのれの表現を見出すことができず、それを侵犯し崩壊させることによって秩序を蝕む変則性としておのれを表示するにいたったのである。つまり馬を描いて、それが馬でありながら馬でないという倒錯のうちにガリアの心性はおのれの表現を見出すことになる。ただ、それが意図的な追求でありえないのはもちろんで、かれらは乱脈なおのれの心性に従って「暗示作用に振り回されるがままに」そこにたどりついたのである。したがって、御し難い疫病に内部から侵されたかのように、ぶざまにねじれ膨れあがり、どこか陽気にその異形を誇示する「ガリアの馬」は秩序ある形式としてはおのれを表現しえない闇の力の主権の表明なのである。そして端正な形式を模倣しそれを侵蝕することで秩序にとっての否定性としておのれを表示するというこの倒錯した表現の二重性こそは、形式としての表現とは縁のない闇の力が表現のうちにみずからを浮上させる固有のしかたなのである。

「ギリシャの馬」と「ガリアの馬」との対比はそれゆえ、調和と破格、端正と突飛、気品と粗野といった、秩序と無秩序の対立に要約される対比的特徴によって区別された、単なる表現様式の2項対立に還元されるものではない。無秩序は無秩序というもうひとつの様式ではなく、文字通り表現の秩序の崩壊であり、秩序とは異質なものによってもちこまれた惑乱、あるいは表現がひとつの秩序であるためには排除すべき要素の規則をこえての氾濫なのである。すなわちこの二つの馬の表現の差異のうちに見なければならぬのは、二つの

様式の対立ではなく、様式とその侵犯との対比なのである。無秩序もまたひとつの秩序だと断言することは、異質なものの表現を、高所から眺め更に高次な様式という論理的わく組みのうちに同化回収してゆこうとする姿勢である。つまり差異としておのれを表示しているものに対し、それとは外在的な超越的な立場から共通の論理のわく組みを設定し、全体をひとつの高められた総合へと、論理的秩序へと一元化してゆくものである¹⁰⁾。だがバタイユはこれとは全く逆の動きをたどる。表現様式の相違は「事象の本質的状態の発現」であるとして、並列的に現われた様式の相違を、それが発現であり徴候であるような還元不能な異質性へと送り返しているのである¹¹⁾。

「ギリシャの馬」と「ガリアの馬」とはこうして「安定した組織化の能力」と「不安定と、はけ口のない昂奮」、いいかえれば明晰な理性と盲目の心情(闇の力)とに結びつけられるが、この両者は個別に分離された二つの要素ではなく、前者は後者を観念の秩序へと転化する力であり、後者は前者のそうした傾向によって必然的に抑圧されるという力動的な対立関係によって結ばれている¹²⁾。それゆえ「ギリシャの馬」と「ガリアの馬」とは単に理性と闇の力との表現であるのではなく、前者が表示しているのは闇の力を圧しての理性の支配の貫徹であり、後者のそれは理性の支配を転覆しての闇の力の氾濫だといふべきである。だからこそ「ギリシャの馬」は表現における理性の主権を証しており、「ガリアの馬」はやはり表現における闇の力の主権を表示するものだというのである。そのような意味あいでは、「ギリシャの馬」は、完成した純粋な形式へと赴くことを本性とする理性の、対象の明確な把握とその表現を通じての自己実現であり、一方「ガリアの馬」は、理想の権威とは無縁な闇の力の、借りものの表現された形式に逆っての表出とみなされるのである。そしてこの二つの表現様式の本質的な差異は、一見して識別されるどんな個別の特徴要素でもなく、まさしくこの通じてのと逆ってののうちにあるのであり、単一的で完備した秩序のうちに表現を完結させる通じてのが見えなくした(抑圧した)ものを、逆ってのが表現の二重化によって再び浮上させているのである。

この表現の二重性、規則的な形式を侵犯する否定的な力の現前こそは『アカデミックな馬』の言説を特徴づけるものにほかならない。この言説を不透明に

している奇妙な逸脱は、逸脱によってしかおのれを表現しえない言語の外（決して言語に還元されえず、いかえれば概念化することができず、言語はとりあえずというかたちでしかそれを表現代行できないという意味で）にあるものの固有の表出なのである。この文章は、理性的な表現を批判し、「人間の夜」の表出への積極的な評価と説得をめざした論理的なしかたで提出しているわけではない。「客観的」判断という慎しい装いで後者の優位の「必然性」が導き出されてはいるが、「客観性」は人間の尺度と展望とを逸脱して、正当な論理がふまえるべき階層（自然現象と文化事象）を混同し、荒唐無稽というのでなければナンセンスな展開によって、あらかじめ言説の語る部分は無力になっている。それはあたかも、内奥の擾乱という嵐の海にしたたかゆさぶられた理性がもちまへの制禦の力を失い、不安で暴力的な酔いのなかのまどろみのうちに語り出すうわごとであるかのようなのだ。思考し、語るのがつねに理性にふりあてられた役割であるとしても、ここでは理性はもはや表現における主権を維持してはおらず、主権は、語る機能をもたず盲いた心情のざわめきとしておのれを告げるばかりの内奥の擾乱、「はけ口のない昂奮」の側にこそある。理性は語る。けれども理性は足もとから擾乱にしたたか揺さぶられ、闇の力の侵透に貫かれ制禦の権能を失ってもはや言説におのれの目指す秩序を課してゆくことができない。それは今や言説の主体ではなく、機能を篡奪され、盲目で無分別な力の「語る口」となって、その乱脈さやおぞましき没義道さに見合った言説を、無力さ（理性の）と激しさ（闇の力の）との共在する酔いのさなかで語り出しているかのようなのである。

だが妄言のように吐き出されるこの無分別な言説のはめをはずした乱脈さが表示するものは、理性的な言説の閉鎖的な自足性をうち破る異質な力の荒々しい侵入であり、言説の秩序に還元されることを拒む主体の規則を越えての氾濫である。この完結性の欠如（完結のために一步足りない未完結ではなく、完結のわくをあらかじめ溢れ出るがゆえに可能な完結を奪われた過剰なるがゆえの不可能性、そうしたものとしての完結の欠如）を抱えこむことによってはじめ、この言説は理性に限定されない主体の十全な表現となりえているのである。そしてこの「過剰なるがゆえの欠如」、否定的なものの充溢として表現の

うちにもちこまれた変則性こそ、あの「ガリアの馬」に不埒で野放図な闊達さを与え、それをみごとに闇の力の発現たらしめているものにほかならない。

もはや改めていうまでもなく、『アカデミックな馬』と奇妙にも題されたこの一文は、まさしくそれ自身「アカデミック」な装いのもとに規則が領する「アカデミック」な言説の気圏に躍り出た一頭の「ガリアの馬」なのである。ガリア人が形象表現の領域で「暗示作用に振り回されるがままに」なしたこと、闇の力の優位性の表明を、バタイユは言説（つまりは思考の表現）のうちを実現しようとしているのだ。端正な馬のかわりに河馬を描くことが、ガリアの心性の客観的な表現ではありえても、この心性がおのれを適確に規定する能力をまさしく欠いたものであるがゆえに、その主体的表現ではありえず、むしろそのような反省が可能なギリシャ的発想を示すものであると同様に、闇の力の優位性を申し分ない論理で証明するとしたら、それは逆に理性の勝利を暗黙のうちに証すものになってしまう。それゆえここでは、表現の秩序にとって否定的なものを否定的なままで表現することが問題なのだ。つまり形式とか論理とかいう肯定的なものに還元することなく、逸脱や倒錯や荒唐無稽が積極的な意義を担うのはそのためだ。言説の語る部分に対してその機能の阻害となり麻痺をもたらす部分、いささか暴力的に仕組まれたこの沈黙の部分こそ、表現における闇の力の分け前なのである。そしてこの否定的なものの露出は、おのれが全てを語りうるかに思いなして、ある完備な秩序のもとに語り尽くそうとする言説を、おのれの倒錯を通して、語りえないものをこそ現前させるそれへと変容させるのである。

ここには論理としておのれを表現しながら全てが論理に還元されることを徹して拒む思考がある。思考が論理として展開されなければ意味がないとするなら、そしてある秩序の形成を目差すのがその宿命であるとするなら、この思考は思考する営みの中核において、おのれが思考であることに抗う思考だといえるだろう。それは、おのれが思考として有効であるために従わなければならない条件の居心地悪さに身をよじりながら、思考以上のものであろうと熱望しているかのようだ。思考とは理性のはたらきであるのに、まさしくこの思考の主体は感性的な闇の力であり、その無分別な力が理性の支配に揺さぶりをかけ、

その惑乱を通して思考の[●]実践のうちにおのれを表示しているのだから。この主体は、規則になかった言説におさまることを拒み、それを侵犯し崩壊させつゝには荒唐無稽なかたちにいたりついてはじめておのれの適確な表現を見出すことになる。『アカデミックな馬』とは、そうした言説の「堂々たる化け物」であり、「ガリアの馬」がそうみなされたように「イデアリストたちの平板さと傲慢さに対する、ぶざまでおぞましい人間の夜からの決定的な応酬」なのである。それが「決定的な応酬」であるのは、この言説が、理性の支配とその軛に対する抑圧されたものの反抗について語りそれへのオマージュを捧げることによって、本来言説的価値をもたぬものの名を言説のうちに戻収することに甘んじるのではなく、いかえれば「ガリアの馬」について述べべるのではなく、みずから「ガリアの馬」となることによって、言説におけるその外の力の主権を身をもって示すことで、徹底してイデアリズムを拒むものだからである。そのようにしてバタイユの言説はまた、[●]実践という規定を不可避なものとして要求している。

*

* *

バタイユは、変則的な言説の展開をとおして思考とその表現における闇の力の主権を示したわけだが、生命や欲望という語にじかに結びつき肉体へと開かれたこの感性的部分は、理性が人間を自然に対立させるのに対し、人間の自然性（動物性）をなす部分、人間がみずから自然との連続性を生きる部分である。バタイユの言説は、言語そのものとはなんら関わりをもたずただほとんど盲いて生きるだけのこの闇の部分につねに送り返されている。それゆえ、のっけから規則の踏み外しとみえた「自由」という語、「人類がその特権的な発現であるばかりでなく自然にもそれが分配されている」ことをバタイユが自明のこととする「自由」にも、別の様相を取り戻させなければならない。

通常の意味では「自由」とは、基本的には自然に対する人間の自律性にほかならず、あらゆる種類の所与の条件から拘束を受けずにおのれの意志に従って選択し振舞う可能性だといえるだろう。だがそれは理性的人間にとっての自由であり、理性の権能の別名にほかならず、理性が与える展望のもとに把握され

た世界の中での「自由」である。ところで、ニーチェに倣っていうならば、理性それ自体は非合理的なものである¹³⁾。いいかえれば理性もまた自然なのだ。だがこの「自然」は自然それ自身に対立する。そしてこのような「おのれ自身に対する永続的な反抗」をも生み出す無頓着さこそ、合理的な意図や目的をもたず無限定なままにおのれを消費するばかりの自然の恣意性の顕著な発現なのだ。とすれば、バタイユは「自由」を理性の権能よりもむしろ、感性的部分のうちに貫徹するこの自然の恣意性に結びつけているのだといえよう。つまり「自由」とは、理性のなす思惑や計算に結びついた意識的な選択として表明されるものではなく、逆に理性の支配するそのようなあり方の中でしか生きられない人間の条件への、「人間の夜」からする無分別で暴力的な反抗のうちにこそ表明されるのである。

「ガリアの馬」や、それ同様「アカデミックな構図の消滅」¹⁴⁾によって顕著に特徴づけられる現代絵画の変貌のうちに、あるいは、合理主義的ブルジョア的生活のあらゆる価値や権威に対する否認を標榜したシュルレアリスムの運動、そしてさらには近代社会の下層に封じこめられてきた労働者層による革命の昂揚のうちに（今世紀初頭、すなわちバタイユの時代にすべては集中的に露呈した）、バタイユが見出すのはそうした反抗、すなわち、人間における闇の力の主権の表明、そのすぐれた表現なのである（そこにもうひとつ、こうした透視を可能にする中核的契機として、ほかならぬバタイユの「体験」が浮かび上がってくることを認めないわけにはいかない。この「体験」こそはバタイユを特権的場として生起する「人間の夜」の顕現、自我と理性の支配する人間的現実の世界——服を着た人格者の、視線に照らされた「昼」の世界——を崩落させ、その空虚のうちに無意味な笑いを散りばめた「夜」を開く、内奥の過剰な生の暴力的な噴出ではなかったか？¹⁵⁾そしてさらに付け加えるなら、性の問題はこれらすべての現象の同時代的課題として登場したのではなかったか？）。バタイユはそれらを「妥協を知らぬ唯物論」それも「低次の唯物論 bas-matérialisme」の発現だとする¹⁶⁾。もちろんバタイユのいう「唯物論」とは存在論的論議ではなく「おのれの精神体系のうちに監禁され潜伏させられている人間の生を無造作に解放してやること、すべて生々しく不快なもの、壊すに壊せぬも

の、あえていえば陋劣なものに手段を求めること、すべて精神をたたきのめすもの、路頭に迷わせ嘲弄するものに訴えること¹⁷⁾、つまりは闇の力の実践的表明の謂いである。そしてそれが「低次 bas」であるのは、「物質 *matière*」と呼ばれるものがまさしく観念ではないがゆえに、規則正しい精神の秩序に組み込まれようもないものとして、必然的に低きにあらざるをえないから、いいかえれば、上下高低の指標で示される価値判断がそれ自体観念的な秩序であるかぎり、低いというのは物質の本来の性格だからであり、また、言説としては、従来の唯物論が観念論的精神秩序の転倒を企てながら結局は、「物質」という概念に価値を与えることによってこの観念に還元されえない要素の亡霊だけを言説のうちに回収するに終わり、みずからは「アカデミック」な言説としてイデアリスムの土俵に踏み迷うことで犯してきた「観念論的錯誤」¹⁸⁾をきっぱりと斥け、みずからも言説の体系的回路のうちに回収されえない「粗野で低劣な」言説として、はっきりいえば言説の「汚物」として、没義道な闇の力をじかに代表しようとしているからである（註15参照）。

『アカデミックな馬』（をはじめとする「ドキュマン」の諸記事）が、「最近のこうした否定」によって「存在の基盤を告発されたかのように」逆上した人々ばかりでなく、当のこの「否定」の運動の担い手たちからも齟齬をかったことは周知のとおりである。それはいうまでもなく、バタイユの文章の中でこの運動が「ぶざまでおぞましい人間の夜からの応酬」に重ね合わされ、かれらが最も高い価値を与えてその権利回復を要求した、人間生活の中の疎まれ蔑まれ抑圧され排除されてきたさまざまな要素（夢、無意識、性的活動、等々）、「嘔吐を誘う掃溜」とか「何の意味も効用もなく希望も安寧もいかなる権威ももたらさぬもの」に結びつけられているからである。だがバタイユはこれらの要素を蔑んでいるのでもなければ、醜悪さや汚穢への嗜好を倒錯的に誇示しているわけでもない¹⁹⁾。ただ、それらの価値を高めるためのいかなる努力も払わず、忌わしいとされたものが忌わしく低いとされたものの価値が低く、闇が闇であり無が無であることをそのままに承認して、付与される価値ではなくそれぞれの要素固有の強度に訴えているのである。そうすることで、一段と棟を高くした観念的わく組みの中に去勢しながらそれらを還元することになる擬似弁証

法というイデアリズムの罟（A・ブルトンが、その意に反してときとして陥っている罟）を、徹底して拒んでいるのである。低きにあるものは、間違っ^て低いと判断されているわけではなく、人間精神なるものがそれを低くする（抑圧する）ことによっておのれの秩序を成立させているのであり、従って問題は、上下の方向づけをもつ価値のわく組みには手をつけぬままそこに記入された項目を書きかえることにあるのではなく、このわく組みそのものを無効にすることなのである。つまり価値判断することにおいて正しいかどうかを問うよりも、価値そのものについて客観的でなければならないのだ。価値転倒とはこれを称していうのであり、それは上・下の入れ替えではなく、上・下の軸そのものを横転させ宙吊りにすることなのである。

バタイユはそれを、かれが「語の職能」²⁰⁾と呼んで意味作用から区別したものの活用によって実践している。文脈の上からは当然称揚されることになるものにそれを貶める不快な語があてられ、またその逆の記述がなされ、そのことによって価値は混乱し無効にされ、かわってそこに心情的価値ともいうべき強度がおのれを主張しはじめるのである。それが、バタイユの言説に異様な生々しさを与えているのは既にみたとおりである。

「ドキュマン」の諸記事は、こうした決して体系たりえない「唯物論」的言説の集成であるが、『アカデミックな馬』が、使い途のない貨幣の表面から言説の舞台に躍り出たのは、表現の問題を語ることを通じてこの不浄な言説の方法とモチーフとを映し出す、最初の実践としてなのである。

註

- * 便宜上、本文中の論文・記事の類の題名は『 』で示し、雑誌名は「 」で示した。
- 1) 1920年代後半、《Documents》以前に Bataille は既に *Histoire de l'œil* (1928)、*L'anus solaire* (1927) を書いているが、前者は匿名出版であり後者の発表は1931年である。また、《Aréthuse》の諸論文及び1928年プレコロンビア展に際して書かれ *L'Amérique disparue* はいずれも国立図書館員の資格で書かれている。
 - 2) B. Noël: Sur 《Documents》, *Documents* (Mercure de France), p. 9.
 - 3) *Œuvres Complètes de Georges Bataille*, tome I. (Gallimard) p. 212. 以下 OC, I. のように略記。
 - 4) 《Documents》の雑誌としての性格と編集体制、そこでの Bataille の役割などに

- については、M. Leiris: *De Bataille impossible à l'impossible* 《Documents》, in 《Critique》, 1963, août-septembre, pp. 685—693 参照。
- 5) *Ibid.*, p. 693.
 - 6) もちろんここで問題にするのは Cheval académique である。《Aréthuse》の論文はれっきとした研究論文であり従って「通常の」古銭学の性格を備えている。とはいえそこには、不安な気紛れに身を委ねるある浪費型の文明への共感があらわれており、すでにその点で Bataille の刻印を帯びている。とりわけ *Les monnaies des Gpands Mogols au Cabinet des Médailles*, *OC*, I, pp. 107—119 参照。
 - 7) *Documents*, (Mercure de France), p. 10.
 - 8) 以下「 」内は原則としてすべて Cheval académique, *OC*, I, pp. 159—163 からの引用。翻訳は片山正樹氏のを参考にさせていただいた。
 - 9) Bataille がとりわけ重視するのは A. Breton を中心とする *surréalisme* というよりむしろ、19世紀末以来深化してきた絵画上の変革であり《Documents》中、直接間接絵画に言及する箇所が目立っている。
 - 10) こうした論理的還元 (Hegel がその代表者とみなされていた)こそ Bataille の最も固く斥けるところであり、《Documents》諸論文の中心的モチーフのひとつとなっている。Figure humaine, *OC*, I, pp. 181—185 がこの問題をテーマとしている。序に言えば、Hegel の弁証法が単なる論理的還元の道具立てではなく、理性の自己実現の径程として生きられた体系を映し出すものだとき、Bataille の Hegel 評価は大きな転回を見る。
 - 11) 言表が言表行為の主体について何を意味しているかを問う、Nietzsche の徴候学的視点の応用ともいえるだろう。Bataille の Nietzsche 耽読は1923年。Notice autobiographique, *OC*, VII, p. 459 参照。
 - 12) Freud が『快感原則の彼岸』(1920)の中でそれまでの意識(前意識)/無意識の対立にかえ、心的機構の新しい定式化を示しながら「統合する自我と抑圧されたもの」という対立を前面に出しているのを思い起し、Bataille のそれとの表現の近似性に留意することは無駄ではないだろう。
 - 13) Nietzsche, 『曙光』124, 『善悪の彼岸』9, など。
 - 14) Architecture, *OC*, I, p. 171.
 - 15) *L'expérience intérieure*, 2^{ème} partie: Le supplice の冒頭に回想された体験は1925年前後のことと推定される。この「体験」ははじめ宗教的なものであったが、1920年6年来の信仰を失って以来 Bataille はいわば自覚的に非宗教的である。そしてこの教義なしの「体験」こそ、*transports liés à la vue du sang ou à l'horreur*, (中国の極刑の写真を前にしての恍惚—註) *hurlements démesurés, c'est-à-dire ce qui n'a aucun sens, aucune utilité, n'introduisant ni espoir ni stabilité, ne conférant aucune autorité*, (*OC*, I, p. 161) と描かれうるものではないだろうか。

- 16) 次の引用も共に La 《vieille taupe》 et la préfixe *sur*, *OC*, II, p. 93. いうまでもなく, *bas-matérialisme* は, その名を標題にもつ, 記事の中で, 定式化をえている. *OC*, I, pp. 220—226.
- 17) Nietzsche, *Ibid.*, p. 93.
- 18) *Ibid.* aberrations idéalistes の内容については *Matérialisme*, *OC*, I, pp. 179—180 参照.
- 19) A. Breton が *Second manifeste du surréalisme* (1930) の末尾で Bataille の「汚穢嗜好」を非難しているのは周知のとおりである. また R. Gashé は《Documents》を論じた *L'avorton de la pensée*, in 《Arc》, N° 44, 1971 の中で *Cheval académique* について, *Même si Bataille déprécie le scientifique en la qualifiant comme une arrogance, il n'en discrédite pas moins aussi le barbare* (p. 12) と述べているがそうだろうか?
- 20) *Informe*, *OC*, I, p. 217. Un dictionnaire commencerait à partir du moment où il ne donnerait plus le sens mais les besognes des mots. Ainsi *informe* n'est pas seulement un adjectif ayant tel sens mais un terme servant à déclasser, exigeant généralement que chaque chose ait sa forme, *besogne* とはいはば語の機能内での使用価値的側面であり, 意味表象としての作用をこえて言説の中で働くのである. R. Barthes は, これを *mot-savoir/mot-valeur* として言い直している. *Les sorties du texte, Colloque de Cerisy*, 1973, p. 61 参照.

語の用法に触れた序に言えば *Cheval académique* (及び《Documents》諸論文)の言説にはもうひとつの方法がある. それは *substituer l'aspect au mot* comme élément de l'analyse philosophique (*Langage des fleur*, *OC*, I, p. 174) というもので, *le cheval*, situé par une curieuse coïncidence aux origines d'Athènes, est l'une des expressions les plus accomplies de l'idée, au même titre, par exemple, que la philosophie platonicienne ou l'architecture de l'Acropole, (*OC*, I, pp. 160—161) という断言を導くのは, この *aspect* による思考である. 本稿の論題はこれへの言及をまっぴらに一応尽くされたことになる筈だが, 今回は紙数の関係上割愛する.